

子どもとわたし

1B030958-0 法学部四年 広田 美佳

(動機)

私の心の中には常に「こども」というキーワードがある。私はサークルで、アルバイトで、様々なかたちで子どもに積極的に関わってきた。今年の夏休みには、地元の自治体が募集している児童館のアルバイトに応募し、約二ヶ月の間、週五日で子どもの世話をした。また、サークルでは、教育をメインとし、子ども対象のイベントを実施している。ここまで述べたところで単に子ども好きな人との印象がつくだろう。もちろん子どもを見ると、顔がほころんでしまうくらい好きである。

しかし、いざ接するときとなると、どう接しようか色々考えこんでしまうことがある。こう考えるようになったきっかけは児童館でのアルバイトなのであるが、児童館では勉強を教えるということはあまりなく、ただ子どもたちと遊ぶことが主な仕事内容なのである。子どもたちからすると大学生という存在は特別らしく、親とさほど変わらない、またはそれ以上の年齢の指導員に対する態度とは違って、一緒におにごっこやかくれんぼをしようと私に対してせがんでくる。そして毎日のように子ども同士のけんかが絶えず、その仲裁役を強いられる。私は当初、けんかがおこった場合、他の指導員に従って、けんかをした子どもの両者の意見を聞いて、最初に手をだした方に対して「〇〇ちゃんに謝りなさい」と事を解決してきた。しかしこのやり方に対し、私の中ではなにかつかかかものを感じ、けんかが起こったとしても大人が仲裁する必要はないのではないかという結論に達した。そう考えるようになって以来、子どもが私に解決を訴えてきても、私はあえて首を突っ込まないところにいるように見守った。私は私なりの考えで、そうすることが子どもにとって良いことだと思い、黙っているようになった。それが私流の子どもに対するやさしさの一種であると思っている。また、これに近いわかりやすい例でいえば、子どもに勉強を教える際に手取り足取り教えるのではなく、子ども本人に気づかせる間を置くことが近いと思う。

児童館での経験は私にとって忘れがたい経験であった。子どもに対してどういう存在になろうか日々模索していた。時には前にも述べたような多少突き放して子どもに解決させる方法もとるし、また時には子どもに返って泥んこ遊びに没頭して、一緒に達成感を味わったりもした。児童館に来ている子どもの約半数はシングル家庭であり、多くが一人っ子のため、私は兄弟のような役割も演じたりもした。児童館を去って二ヶ月経った今、私は改めて子どもとの関わりあいについて考えてみたい。私は子どもたちにとってどんな影響を与えたであろうか、一時の楽しさでおわってしまっていないだろうか。そして自分自身に問いかけてみる。あのとき自分はよくやったと、自己満足に陥っていないだろうか。改めて考え直してみたい。

(対話)

私は、今回大学の友人で、ずっと塾講師のアルバイトをしているという T さんと対話をすることにした。その理由は T さんが子どもと接する講師という仕事をしているため、どう子どもたちと接しているのかを知りたかったからである。また、T さんは一度、私の所属する教育ボランティアサークルの活動のひとつである小学校での放課後学習に手伝いにきてくれたことがあったため、どういった場に私が身を置いていたかを知っていたからである。

対話は約一時間にわたって喫茶店で行った。対話の形式はまず、私の動機文を読んでもらい、それに対する質問と意見を述べてもらった。

1. 「子ども」というキーワードとその理由

T さん：なぜ、「子ども」というキーワードがあるの？

私：一番の理由は子どもが好きだからだね。(その理由はかわいらしいところ)

そして二番目の理由は子どもはなにも知らないからかな。どう教育するかによって、成長が変わってくるからだと思う。

→これには特に私自身の国をよくしたい、そのためには「教育」と「経済」に力を入れるべきだという考えがもとにある。

T さん：では、このキーワードにはふたつの異なる理由があるんだね。

<気付いたこと>

私は元からの子ども好きという気持ちと、自分自身の中にある理念とを重ねていたことを再認識した。

2. 子どものけんかの仲裁はどう対処するか

T さん：「私は私なりの考えで…子どもの仲裁に敢えて入らない」というところでなぜほかの指導員のように(仲裁に入るように)しなかったのか？

私：大人の考えを押し付けることは子ども自身で考えることをなくしてしまうと思う。

子どもはけんかした理由を子ども自身できづかなければいけないもの、私は子ども自身で考える場を与えたかったから。しかし、大人が仲裁することに対しては反対ではないと思う。必要なときもある。子どもが間違っただけで一方的な終わり方をしていたら入るべき。区別をしたかった。けんかがあったから入るというスタイルにはしたくなかった。T さんはどう思う？

T さん：自分たちで少しでも考える時間を与えようというきっかけからそういう考えに至ったってことね。偏りすぎてはだめ、指導員の立場はその間が大切なんだね。私も子どもはとてもデリケートだと思うから絶対どっちかの味方にはつかないように心がけているな。あと、私の場合はまず問題が起きたらとりあえず早く仲裁して、話を

個別に聞くようにしてる。中にはなかなか話さない子どももいるから他愛のない話をしてるうちにリラックスしてくると、本音を話してくる子もいるね。大人はそれだけ子どもを慎重に扱わなければならないと思うよ。そこからコミュニケーションで引き出して、大人は子どもに対して原因を伝えるだけでいいのではないかな。

私：子どもは自分の思っていることを伝えにくいので、それを相手の子に伝えるだけでいいってことだね。なかには「あなたが悪いのよ。」と決め付けてしまう大人もいるが、それは逆に悪いといわれた子がものすごく傷ついてしまうことが多いよね。あと、私が考える時間を与えなかったというのは心が育つためにはその時間が必要だと思ったからかな。先生が言っていることが正しいわけではない。日本の子は自分の意見をしっかり言えてない。先生に「謝りなさい。」といわれて「はい、ごめんなさい。」でおわっていることが多いよね。自分で考えて自分が悪かったなあとと思うことが大事。相手の気持ちを理解できる子になるにはその過程があるからこそ。大人に言われて「ごめんなさい。」する子より、自分で考えてわるいことしたなと思って、「ごめんなさい」する子では心のもちようがずいぶん違うと思う。相手の気持ちを理解できる子になると思う。

Tさん：自分で考えて自分で主体的に謝る子がそれこそが相手の気持ちに立っているんだね。具体的には子どもに気づかせるにはH（私）さんはどうやってやるの？

私：（しばらく考えてから）夏の学童でうまいなと思う指導員がいて、どっちが悪いか決め付けしないで、お互いの意見をよく聞いて、その子の癖（たとえば口が悪いけど、やさしい心を持っているから理解してあげて）と相手の子に伝えてあげる。どっちがいけないと決め付けない。これはやり方のひとつだと思う。Tさんとほぼ同じだね。ただ、ほかにももっと方法があると思うからそれはよくわからないな。

Tさん：とりあえず、意見を聞きあう。そしてそこからスタートする。

3. 指導員（大人）と兄弟の役割（遊び相手）との境目について

先生（指導員）が与える子どもへの影響について

Tさん：「兄弟の役割も演じた」というところで、指導員と兄弟の役割との境目はどうつけたの？

私：一番悩んだところです。指導員のなかでも私は子どもたちに一番年齢が近いからすごく喜んでた。指導員はしっかりするところ、けじめの部分は指導員らしく、たとえばボールが出しっぱなしのときは片付けるまで待つし、時間を守らせる。ただ失敗したなと思うのは兄弟みたいな役割が多すぎたと反省している。兄弟：指導員の割合7：3くらいだったかな。（苦笑）

Tさん：あと、続けていくけど、私は子どもたちにとってどんな影響を与えたであろうかの部分について。どんな影響ならOKなの？また逆にどんな影響ならNGなの？

私：難しいね。悩む。一人っ子が多くてとりあえず元気いっぱい遊ばせたかった。で

いいのかな。わからない。逆にどう思う？

Tさん：まず、兄弟と大人は7：3でいいと思う。学生の（先生）場合は特にさ。しっかり管理をするようなタイプの先生が他にいるのだから、学生までそれを真似る必要はないと思う。まあ、いない場合は5：5くらいがいいと思うけど。でもね、子どもへの影響の質問とも繋がるんだけど、あんな先生いたなーと思われるのが大事。あの先生みたいになろうと思うだけでも十分。子どもの記憶に残ればいい。こういうときどうすればいいんだろう、ああ、あの先生はこうやってたなあ、あの先生はここがダメだったなあと子どもが私たちくらいの年齢になったときにおもいだせばいいんだよ。

私：ダメなところでもその子が振り返ることでその子のためになるなら、とりあえず記憶にのこればいいかなあ。でも、出来るだけダメなところはさらけ出さないようにすべきだと思うけど。

Tさん：いままで多くの先生に会ってきたと思うけど、覚えているのなんて数人でしょ。その数人になればいいんだよ。悪い先生も記憶に残るが、悪いと思うならそれはそれでその子の成長だし。

私：それは私にない視点ですね。私はよく思われようという意識ばかりだったんで。あと、記憶に残ってほしいっていうのはもちろんあったんですけど、それは自己満足じゃないかなと思ってたんで、また考えてみます。

対話を通して感じたこと

内容自体が教育的な意見を述べるものになったが、人の話を聞くと、同調することもあるれば、私とは違う視点があるなど感じる部分もあった。質問されてうまく答えられない、自分自身でもどうしたらよくわからなかったところを対話できたところはとてもよい経験になった。Tさんは長年塾講師をしているとはいえ、子どもの立場（子どもの気持ち）にたっているなど感じた。私は先生をやっていると、逆に大人としての立場から指示をだしているイメージがあったので、そのギャップに驚いた。私はこの対話をきっかけにもっと、ふくらましていける要素がたくさんあると感じた。次回以降もっと掘り下げて考えていこうと思った。

（結論）

私は動機文作成・対話を経て「子ども」について自分なりの考えを述べたり、議論したりしてきた。そしてそのことによって私の「子ども」に対する意識はずいぶん変化し、明確になったのではないかと考えている。

特に、私の存在が子どもに対してどういった存在であったか・あるべきかを中心に考え、このレポートを書くに至り結論をだした。まず、対話の中で、私は子どもの見本になるような、こんな大人になりたいと思わせるような役割をしたかったが、実際はほとんど子ども

もと一緒に夢中になって遊んでしまって、指導員らしからぬ行動が目立ってしまったと反省した。しかし、対話相手である Tさんは、それで良しとし、どんな先生でも記憶に残るような強烈な印象を与えて、将来子どもが成長する過程で「こんな先生いたな」と思い出すことが重要だと述べた。その意見に対し、コメントを下さった Mさんからは、ダメなところを敢えて見せるのは好ましくない、なぜならば子どもたち全てがその「ダメなところ」を反面教師にできるわけではないという意見をいただいた。ここで、私は三通りの意見をよく考えた上で、以下のような結論を出した。私は妥協しない、一生懸命な態度で子どもたちに接することが子どもの心に一番影響を与えるのではないかと思う。特に私たちくらいの二十代前半の大人はまだ子どもの扱いに慣れていないことが多く、とまどいが生じやすい。そのため、失敗も多いであろう。私はその失敗を見せまいと必死に隠すのではなく、むしろ、子どもの興味を引き立てるくらい頑張る姿勢が大切なのだと思う。子どもに何かを伝えようとし、どうもうまくいかなかったとしても、子どもにその思いを感じるだろうし、中には代替案を出してくれる子どもだって現れるかもしれない。なので、私は意見をくれた二人の意見も取り入れて、「ダメなところ」が出てしまったときは仕方ないけれど、それをカバーするくらいのやる気と懸命さをもって伝えようとする心を常に持つことが大切だとの結論にいたった。

また、このレポートの中で私にとって明確にしておかなければならないことは、「子ども」を自分の中でどう位置づけしているかであった。この部分に関してはメンターの方からもご指摘があった。対話の中であった通り、私は子どもを二つの観点から見ている。一点目は無邪気てかわいい子どもが好きであるということ。そして二点目は日本という国をよくするためには「教育」と「経済」に重点を置かなければならないという私自身の考えが根本にある。資源のない日本は人材がなによりも重要であること、そしてそのためには教育がしっかりしていなくてはならないと考える。そして、経済はどこの国にも欠かせない要素である。まるで、就職活動の志望動機のようになってしまったが、そのような考えのもとに、単にかわいらしいから好きということとは別種の、もうひとつの「子ども」というキーワードがあると思う。ここで、子どもというキーワードは適切か悩んだが、二点目は「教育というカテゴリーの中でいう子ども」と呼んだ方がよいかもしれない。ここまで、範囲を広げると、このレポートは児童館での働きから随分離れてしまったように感じるが、「子ども」の対していかに自分をもつべきかを広い範囲から考えることができたと思う。

以上に述べた事柄は対話において述べるべき内容かもしれないが、対話をアップすることで、いただいたコメント等を含め、再度考え直したものである。あえて結論として書いた。動機文を書いていた当初は、私はある程度「子ども」や「教育」について自分なりの考えをもっていたのでその考えはあまり変化しないだろうと思っていた。しかし、いざその考えを人に聞いてもらい、その人なりの意見をもらうということはとても刺激的であった。子どもとの接し方はそれぞれ人によって異なり、またその人なりの考えが顕著に現れるものであるから、その理念や手法を聞くのはとても楽しいものであった。「あっ、こ

こは私と同じ考えだ。」と思う部分もあれば、「こんなところまでは考えなかったな。」と違った意見とぶつかることもあった。

また、今回は学生という身分からの子どもという接し方を考えたのだから、今後母親や教師という立場になったときはどのように変わるのかも議論の余地があろう。

教育問題はいつの時代も議論の対象になるが、単に自分の意見をぶつけるだけでなく、今回のように相手の意見を伺って、それをもとに再度考え結論を出すことはとても意味のある作業だと感じた。私は自分の中で核となっている「子ども」について考えを深めることができたことをうれしく思う。

(おわりに)

私は学生最後にこのようなレポートを書けたことを非常に嬉しく思っています。ここまで、自分自身の考えを文章化して他人に見せ、評価され、そしてまた考えるといった授業はありませんでした。テーマ設定まで自由ということで、私はいろいろ悩んだ結果「子ども」に焦点を当てて考えてきましたが、「子ども」に関する考えは今まで自分自身の中で培ってきたものだからそんなに変わるものではないだろうと思っていました。しかし、対話や受講生のコメントを通し、書くレポートが変化していくのを実感しました。いかにこの一連の作業が重要であるかが分かりました。また、他の受講生のレポートを読むことによって新しい視野が広がり、いろいろと考えさせられるテーマが多く充実したものでした。

自分の考えていることをどう伝えるか、どうしたら伝わるかを考え、そして伝えることは容易なことではありません。しかし、人とのつながりはこのやり取りによって成り立っているのだから、その方法を学び、実践していかなければなりません。最近の社会の傾向として、自分の考え・思っていることをどうやって伝えたらよいか分からない人が増えているように感じます。そのために、暴力や無言の訴えをすることは非常に危険であると思います。私はこの授業の持つ力をこれからもっと多くの人に感じてほしいと思っています。ぜひ、社会に還元し、より充実した教育を提案して行ってほしいと思います。

最後に、顔の見えない講義でみなさんに会うことはできなく残念でしたが、私のレポートを読んでくださった方々、そして多くの興味深いレポートを提出してくれた受講生全ての方々、この講義を進めてくれた細川先生、メンターの方、本当にどうもありがとうございました。

以上